

審査の結果の要旨

氏名 金鎮赫

自己報告は、社会科学や行動科学に用いられる基礎的かつ一般的なデータ収集方法であり、従来、その評価・記録には質問紙やインタビュー調査などが主に用いられてきた。一方、精神疾患や心身症に関連する気分状態や心理的ストレスといった自覚症状を評価し病状を把握する上で、自己報告は、これら疾患の診断や治療の基盤となっている。しかしながら、従来の方法においては、記憶の想起によるバイアスや、ある一定の期間の単一測定により病状の経時変化を正確に捉えることの困難さなどの問題点が指摘されていた。これに対し、Ecological Momentary Assessment (EMA) は、携帯情報端末などを用いて日常生活下でその瞬間の事象を 1 日数回反復的に記録することにより、想起によるバイアスを回避し、行動や気分などの経時変化を把握できる方法とされている。

本論文は、これらのEMAの特長に着目し、想起によるバイアスをどの程度回避できるか、また経時変化が把握できるEMAの記録にどのような要因（例：生理的・環境的要因）が反映されているかを検討し、自覚症状の新たな記録方法として提案されているEMAの有用性を検証することを目的としている。

本論文は、全5章で構成されている。まず第1章では、研究の背景としてEMAの概念的・歴史的・応用的側面や方法論的立場と分析の枠組みが示され、それに基づき2～4章を構成する各研究の研究課題と目的、また論文全体の目的が示される。第2章では、EMAと想起による方法により記録された自覚症状の経時変化が比較され、想起による方法では、自覚症状の経時変化を正確に把握できないことが明らかにされる。第3章では、EMAによる自覚症状と客観的な外的基準となりうる指標として日常生活下での行動パターンが比較され、EMAによる自覚症状が日常の行動的变化に伴い経時的に変化することが示される。第4章では、健常人を対象としている第3章の研究がうつ病患者へと拡張され、うつ病においてもEMAによる自覚症状の経時変化が客観的外的基準に伴い変化していることが示される。以上を踏まえ、第5章では、EMAの有用性を検討する2～4章の研究をまとめ、各章の結果を総合させながら、精神疾患を中心とする臨床現場におけるEMAの応用可能性や、近年の情報通信技術の発展に伴うEMAの今後の展望や課題が考察されている。

本論文は、まず、先行研究が十分に検討してこなかった自覚症状の経時変化について、想起による従来の方法あるいは客観的外的基準との関係を体系的に比較しその関係を解明した点、次に、それに基づき、自覚症状の評価・記録のためのEMAの有用性を健常人とうつ病患者双方において検討し自覚症状の客観的かつ正確な評価法の開発に貢献している点で、特に成果が認められる。よって本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。